

大学院・学校教育専攻（学校臨床心理専攻）、
「感情・社会性の発達と支援」（「情緒発達心理学特論」）

大学院「感情・社会性の発達と支援」の授業と課題

学校教育講座（教育心理学研究室）・橋本 巖

1. 授業の概要

(1)位置づけ：本授業「感情・社会性の発達と支援」は、平成22年度後期より、大学院教育学研究科のカリキュラム改革の一環として、筆者があらたに開講した科目であり、学校教育専攻の「発展科目」（子ども発達支援領域）に位置づけられる。その前身は、平成5年度の研究科開設以来、社会性・情緒の発達と教育に関する科目として筆者が担当して来た授業であり、臨床心理士指定大学院となる際には「情緒発達心理学特論」と改称して発達心理学の一科目であることを明確化した（現・学校臨床心理専攻ではなおその名称で開講）。平成17年度に特別支援教育専攻が設立されて数年間は、定型発達を学ぶ科目としても位置づけられた。現在（平成22年度以降）は、大きくは「実践的指導力育成」を目指す方向性のもと、大学院で「学校心理士」の資格受験要件を取得するための関連科目（発達心理学領域）としても認定されている。平成25年度後期の受講者は、計6名（学校教育専攻4名、学校臨床心理専攻2名）であった。

(2)授業の目的は、「乳幼児期から児童期、青年期における子どもの情緒発達・社会性の発達とその支援について、主に発達心理学の理論と知見によりながら学ぶ。感情発達では、情緒的レパートリーの拡大、自己意識的感情、愛着の発達、共感性、感情表出とその制御、ストレス対処、情緒的自律、レジリエンスなど。社会性については、自他の関係性、コミュニケーション、仲間、家族との関連、など。主要な側面の発達過程と特に学齢期以降の発達課題、および発達に影響する社会的要因の理解と実例をふまえて、支援を考える視点について受講者によるディスカッションを中心に検討する。」とした。

なお、学校教育専攻の発達心理学的科目としては、深田教員が担当する「言語の発達と支援」「認知の発達と支援」という科目がある。

ただし、学校心理士資格科目として認定を受ける場合、発達心理学領域の科目はどの授業でも、乳幼児期、児童期、青年期の発達時

期を含めた内容であること、および、内容として、①学校教育の基盤としての発達心理学、②認知・思考の発達、③自己意識の発達、④社会性の発達、⑤言語の発達、という5項目を15回の授業スケジュールの中でそれぞれ1回以上は取り扱うこと、が課されており、そのようなシラバスを作成・申請して認定を受けた。

(3)本授業のスケジュール

15回分のシラバスを以下に示す（括弧内は例示。番号の下線は、受講者が発表する主テーマとして選択した回を示す。詳細はウェブシラバス参照）：

- 1 生涯発達心理学と学校教育（発達課題ほか）
- 2 乳幼児期の認知・言語発達（乳児の生得的能力、指差し等の前言語的コミュニケーション）
- 3 人生早期の感情と社会性1（愛着、虐待）
- 4 人生早期の感情と社会性2（自己意識的感情）
- 5 幼児期の自己形成と社会性（反抗期、自己制御）
- 6 幼児期・児童期の認知・言語発達1（表象発達、心の理論、ピアジェ理論とその批判）
- 7 幼児期・児童期の認知・言語発達2（学校等での文字習得、メタ認知）
- 8 共感性と思いやりの発達
- 9 友人・仲間関係の発達1（幼児・児童、友人概念等）
- 10 友人・仲間関係の発達2（思春期以降、親友、いじめ、孤独）
- 11 友人関係と感情発達（学級集団および大河原の感情制御不全に関する研究）
- 12 思春期・青年期の自己形成と感情1（第2反抗期、心理的離乳）
- 13 思春期・青年期の自己形成と感情2（アイデンティティ、自伝的記憶）
- 14 生きる力としての感情（レジリエンス、コーピング）
- 15 生きる力としての感情（感情コンピテンス）

(4)到達目標

- (1) 感情・社会性発達の乳幼児期、児童期、青年期それぞれについて課題を理解する。
- (2) 感情・社会性発達と、発達の他領域（自己意識、認知、言語）の関連性を例を挙げて説明できる。

(3) 感情・社会性発達の支援を要する問題や障害の初歩的知識と支援の視点を知る。

2. 授業の方法、内容の工夫(概要)と、授業評価から浮かんだ課題

本節では、方法上の工夫・概要と、実践及び提出物(レポート、感想のメール等)を通しての授業評価から浮かんだ課題とをまとめて述べる。授業評価の方法は、受講者が発表した回に提出を義務づけたメールによる感想(後日まとめて配布)、および、子育て支援センター見学レポートおよび期末にもとめた最終レポートにおける、授業の全体的評価・感想における自由記述、そして、実際の授業中の、筆者による観察に基づいている。

(1)個別発表の工夫とその課題

授業の形態は、原則的には受講者がシラバスから選択した回のテーマ(前記スケジュール参照)に基づく発表・討論を行う「演習」を基本としている。しかし、当然受講者数によって発表でカバーできる範囲が異なるため、認知発達や言語発達など、受講者が選択しないが必須であるテーマ(あるいは学校心理士関連科目の発達心理学として含めねばならない内容項目)については、橋本が「講義」する。その中には、筆者の専門とする共感や感動関する心理学的アンケートやビデオ資料を用いたワークや、授業化の検討も含む。

ただし、指導上の工夫として、受講者が発表でとり組むテーマについても、準備段階で授業時間とは別に個別指導を行い、参考書籍を紹介(貸与)し、テーマに関して外せない分野やキーワードを含むよう、「概論」としての学習の柱立てを求めまとめさせた。加えて、そのテーマに関連した学会誌の研究論文を1本発表してもらった(「論文紹」と称した)。関連論文は、複数の候補を提示したり、学生が検索したものから筆者が可否を判断して、発表する1本を決定させた。

<課題>発表準備における個別(年度によっては班別)の指導段階が存在することは本授業の顕著な特徴だったと指摘する声があったが、受講者の負担感とのバランスを意識している。本授業では、従来から、心理・教育関連領域で修論を書く受講者を意識して、発達の知見だけでなく、研究的な態度・研究手続きや論文の読み方をも学んでもらうおうとしてきた。その具体的な指導上の現れが、

発表テーマについての「概論」に加えて、「論文紹介」である。近年、受講者の多くは、狭義の心理学系以外の指導教員のもとで修論を書こうとする人だが、授業内容への興味と、資格取得を希望する等の必要性の動機づけがあるから、後期であっても修論の専門外に属する本授業を受けてくれると考えられる。しかし、それ故に、心理学的概念の、現実生活や実践面と結びつけた咀嚼や問題意識の把握への授業者の支援が課題となる。また、スキルの的には、実証論文の問題意識一仮説一方法(手続き・材料・分析等)の関連を読み込み、自分なりにまとめる作業が理解できない等の苦戦を目にする場合があった。文献相談の個別指導や過去のレジュメをヒント提示するなど考慮・配慮はしていたが、さらに。概論と論文検討を別の回に切り離して時間を設けること、それにより、授業後の感想メールによらずに、授業内にディスカッション時間を確保するなどが工夫できるかもしれない。またシラバスの精選もありえよう。

(2)地域子育て支援センターの参観

指差しなどの前言語発達や愛着・自己意識的感情などの人生早期の発達について講義で学んだ後、松山市のA保育園が行政から委託されて開く地域子育て支援センター事業(親子ふれあい広場)の参観を実施した。「親子ふれあい広場」は、地域の公民館や集会所で、保育士の支援のもと、保護者と乳幼児ペアが自由に参加し、手遊びリズム遊び、簡単なおもちゃ製作などをする。広い空間で親子同士が一緒に遊び、情報交換する相手を見つけること、保育士に相談するなどの機会となる。就園前の、ゼロ歳から2歳頃が中心のため、前言語期のコミュニケーション、遊びや母子関係を自然に観察できる貴重な機会である。

この取り組みは、乳幼児期に関して授業で学んだ心理学的概念を座学に終わらせず、現場でそのまま目にする機会となり、子ども理解やアセスメント、あるいは育児支援という意味で実践に生かす視点を得ることができる。また、到達目標の(2)にある、認知、言語や運動などの発達と、感情・社会性の発達とがつながることを実感でき、さらに定型発達と発達障害支援等の接点を知る機会にもなる。

感想にあるように、「なかなか学習していることを体験して実感を得ながら学ぶということは多くない」ため、今後も継続したい。